

Hansen, Henny Harald. *Mongol costumes*. København, Nordisk Forlag, 1950. 199p. with illus. 30.8×21.8cm <383. 122-H>

デンマーク国立人類学博物館学芸員ヘニー・ハラント・ハンセン女史による本書は、ハスレント・クリステンセン (Henning Haslund-Christensen) をリーダーとする第1回 (1936-37)、第2回 (1938-39) デンマーク中央アジア遠征隊が持ち帰ったモンゴル服の膨大な収集に基づいて、まとめられた研究資料の報告書である。この2回のモンゴル東部地域への遠征は、モンゴルの物的文化の広範な資料をデンマークにもたらしたが、これらの収集の大部分は衣服、帽子、履物であった。遠征隊はゴビ砂漠の南北、モンゴルの東部地域にわたって分布する22の種族を訪れ、衣服とその付属品をほとんど20種族から収集することができた。

女史によれば、モンゴル服における外国の影響については次のようなことが知られる。13世紀にモンゴルは四つの偉大な文明——ヨーロッパ、イスラム、インド(チベットを経て)、中国の文明——と交流があった。しかし、ヨーロッパとイスラムとの関係は、西モンゴル領域での交通がまもなく中断されたので、モンゴル文化に対して長く影響を及ぼすことはなかった。最も長くモンゴルに影響を与えたのは、チベットと中国で、1577年に仏教がチベットから導入されたが、この時、「ラマ僧服」も入ってきた。チベットからは主に精神的特質、中国からは物質文明の影響を受けた。モンゴル服における中国の影響は様々な旅行者によってもたらされた。中国からの織物の輸入などが、自ら服装における中国風を伴ってきたからである。

内容はまず、第1に「衣服」を取り上げ、寸法、素材と装飾、職服 (togas)、外套、肩かけ、前開き服 (caftans)、上衣、胴着、きゃはん(脚絆)、ズボン、ペチコートなどを解説し、素材、色彩、製作、打合せ法、装飾、裁断、変形、型などについて衣服を分析している。

第2に「帽子」を取り上げ、円すい形、ブリム型、鉄兜型、ボンネット型、スカル・キャップ(半球帽)を解説し、また第3の「履物」では、靴、ブーツ、靴下について解説している。それぞれ「帽子」、「履物」についても、素材、色彩、装飾、裁断などを分析している。巻頭には図版説明、巻末には書誌と索引が収録されている。(佐藤)